

令和5年度第2回高知県教育振興基本計画推進会議 質疑・応答、意見交換の概要

日 時：令和5年9月5日（火）10:00～12:00

会 場：高知県立塩見記念青少年プラザ5階「多目的室」

【議 題】

- (1) 令和5年度施策の進捗状況等について
 - ① 基本目標の測定指標の状況
 - ② 第3期高知県教育振興基本計画（第3次改訂）の主な施策の進捗状況等
- (2) 第3期高知県教育振興基本計画における対策の検証について
- (3) 次期高知県教育振興基本計画策定に向けた各関係者との対話等について
- (4) 次期高知県教育振興基本計画の方向性（案）について

■議題（1）令和5年度施策の進捗状況等について

■議題（2）第3期高知県教育振興基本計画における対策の検証について

（岡谷議長）

議題（1）（2）について併せてご説明をいただき、その中で令和5年度の施策の進捗状況等についても触れていただいた。個別にそれぞれご専門の立場からご意見ご質問等があればいただきたい。

（川田委員）

私は、コミュニティ・スクールに関わり始めて3年目になる。コミュニティ・スクールを動かす中で大切なことは、地域の人材や周りがどれだけ動いてくださるか、そしてその学校がどれだけ情報を発信してくださるか、そのコミュニケーションであり、一番大切なことは人的交流である。今、学校に入ってこられている方は、「地域をどうにかしよう」、「学校のお手伝いをしよう」と、ほぼ無償でこられている。そうでない先生もいると思うが、学校に来てくださる方は皆さんほぼボランティア同然で、そういった今までの流れがあると思う。こんなことは私でしか言えないので申し上げるが、私はコミュニティ・スクールのコーディネーターとして、教育委員会から年間で謝金が出ると伺ったが、次の方のためにどのくらいいただいているのか記帳してみると、年間だと伺ったが大きな金額は記帳されていなかった。この金額だと、次に誰かに渡して手伝っていただくことがお願いできないと思った。お金が欲しいとかではなく、学校に関わる方たちに、時間に見合った対価を教育委員会に考えていただいて、それを人に投入していかないと、コミュニティ・スクールも動いていなくなる。何人かはもう辞めたいとおっしゃっている。民生委員も一緒だと思う。でもその皆さんは、どうにかしたいと思って続けている。これから教育はそれに甘えてはいけない。言い方が変かもしれないが、これだけの方が身銭を切って、でもそれだけの思いを持ってこれを作ったんだという形になっていただけたらありがたい。

（小中学校課長）

報酬等については、それぞれ市町村ごとの学校運営協議会規則で定められている。これまで県としては、それぞれのコミュニティ・スクールの運営協議会を立ち上げることに基づき、国の補助等も使いながら、県も支援させていただいてきた。今後の運用面での報酬をどうするかについては、また今後、市町村の状況等も踏まえて相談をしていかなくてはいけないと考えている。

（教育政策課長）

次期計画に向けてのことについては、どなたであってもボランティア精神に頼るような計画にはならないように留意しようと思っている。

(岡谷議長)

川田委員は春野でコミュニティ・スクールの活動をされているのをよく存じ上げており、そういう思いからの発言だったと思う。

対策の指標に基づく検証という資料の1ページ目の6番の評価がDになっており、これはコロナがあったからということだが、本当にそうなのか。これから学校教育を充実させていくためには、地域との関係が必要で、高知県は特にこの地域との関係をずっと大切にしてきた県だと思っており、そこにどう関わっていくのか、学校運営協議会など学校評価も随分やっけてこられている中で、なかなかここが上がっていかないのはどうしてなのか。これから高齢化社会にさらになっていって、子どもの数が減っていったときに、どこまで地域や家庭に頼っていけるのか、また新しい時代の考え方も必要になってくるのではないかと思う。この辺り佐竹委員はPTAとして何かお考えはあるか。

(佐竹委員)

川田委員が言ったように、ボランティアの面がすごく多く、PTAもかなりそういう声も挙がっている。でも私達保護者としては、やはり子どもたちの健やかな健康や成長を祈って、見守っていくのがPTAの役割と思っている。次の人が長になったり何か段取りをしたりするにあたっては、最低限何か必要じゃないかと思う。私たちはボランティアでもいいが、次の世代の人たちには、ちゃんと対価やそういったものも必要になってくるのではないかと思う。

(岡谷議長)

PTA活動もなかなか引き継いでいくのが難しいという現実がある。志を持った方がやられているので、その辺りもPTA組織としても考えないといけないし、県もどうするか考えないといけない。

(川村委員)

川田委員のお話を伺いながら、自分自身も学校現場に入っているいろいろな体験したことを振り返った上でこの指標を見たとき、正直、違和感を覚えるところがある。

全国評価と比べなければいけないため指標や評価の方法が決められているのは承知だが、内部評価だけでいいのか。定量的に評価できる部分はいいが、定性的なところ、特に質の問題というところで、内部評価に関する項目は、私が感じている状態と違うなと思って見せていただいた。先ほど、地域協働が進んでいないという話もあったが、ぜひ学校に関わる地域の方々の視点や評価、地域と学校に対して第三者的に判断できる方などが忖度なしに評価し、課題に対して解決策などフィードバックできる状態にしていかないと、当然質は上がらない。この評価は先生だけの話ではなく、子どもの学力に直結して響いていくものだと思うので、ぜひ次の計画では評価の仕方も見直していただきたい。

(前田委員)

体の部分で、いわゆる運動が苦手な児童や、運動習慣が定着していない児童がたくさんいることが報告されているが、資料3の8ページの右下に、「運動習慣の定着に向けてタブレット端末を活用する」ということが記載されている。タブレット端末を活用することで運動習慣に繋がるということだが、さきほどの質の問題という話もあるが、多分それだけで習慣を上げようとするとかかなりの労力があるし、先生方がすべて丁寧に動画を作って、こういうふうにやっけてということ全部やるのかと考えたときに、ハードルが高いのではないかと思った。先ほど委員の意見にあったように、学校以外の

人材が支えられる仕組みだとか、外部の組織としっかり連携をしたらよい。特にICTだと都市部の人材をもっと活用すると可能性が広がっていくので、プロフェッショナルの方々との連携なども考えていく必要があると思う。そういったところが、ここに入っているのかどうかの詳細を教えてください。

(保健体育課長)

子どもたちが宿題的にできないかと、今プログラムを作っている。各年齢に応じて作っているのですが、例えばそういうものを使うと、一人でできるものがあれば子どもたちが家に帰ってタブレットを見ながらできるのではないかと考えている。当然、外部の方も活用しながらということも今後考えていかなければならない。

■議題(3) 次期高知県教育振興基本計画策定に向けた各関係者との対話等について

■議題(4) 次期高知県教育振興基本計画の方向性(案)について

(岡谷議長)

次期高知県教育振興基本計画の目標となる部分についてのご説明をいただいた。まず資料5の2ページにある基本理念について、3つ目の「多様な個性や生き方を互いに認め、尊重し、協働し合う人」を新設するということと、ウェルビーイングに繋がる考え方を新設するということである。

私の方から1点、ウェルビーイングというのはOECDの考え方で、これが出てきた背景には、身体的、精神的、社会的に良好な状態が、それぞれの地域やそれぞれの社会、それぞれの時代で変わっていくはずだと、だから一つには決めきれないから、これを考え続けていくことが重要だという意味で、ウェルビーイングという考え方を取り入れたんだという解説が文部科学省のYouTubeにも出ていたと思うが、その辺りのことはどんな書きぶりになるのか教えていただきたい。

(教育政策課長)

まさにご指摘いただいたような趣旨の記載を検討できればと考えている。今般新設した目指す人間像の3つ目の「多様な」の部分も、ウェルビーイングにかなり関わってくる部分である。これまでの定訳では、経済的な幸福だけではなく、多様な状況や社会情勢を踏まえ、様々な面での幸福、生きがいを見いだすといったところでもウェルビーイングという言葉を使用されることが多いかと思うが、社会、地域の状況に応じて、どのような場面、どのような方々と接するかといった様々な場面において、目指すウェルビーイングというのが変わってくるであろうと示されているところがある。なかなか定訳もない中で、いろいろな文脈で使われていたり、様々な分野で使われることによって、意味が多少変わったりする部分もあるので、ここはOECD、また文部科学省の示し方も踏まえながら、ウェルビーイングと目指す人間像の関係性を表すような形で、引き続き検討したうえでご相談させていただければと考えている。

(岡谷議長)

幸福度調査のような形にはならないようにするのか、そういった形にするのか、その辺りはどうか。経済的な幸福だけではなく、精神的、身体的、社会的な幸福というのを、今後高知県として継続的に考えていくといった目標になるのか。高知県は経済的にはそんなに幸福じゃないけれど、精神的にはすごく幸福だというような指標を打ち出していこうとしているのか、もう少し詳しく教えてください。

(教育政策課長)

幸福度調査のようなものやっていくことは現時点では想定していない。

ウェルビーイングも、子どもたちが、例えば自分たちがやりたいことをちゃんとやれるような状況になっているとか、最低限担保しないといけない様々な学習環境の整備とか、そういったことの結果、最終的に行き着くのがウェルビーイングかと思う。測定指標の関係で言えば、例えば「自分には、よいところがあると思う」の質問に子どもたちが「よくある」と思えるところが、最終的に、その結果ウェルビーイングに繋がってくる部分もある。また、今後の学ぶ意欲や様々な運動をする意欲とか、そういったことを身につければ、その子は最終的には学校を卒業した後も、様々な活動をしていく、意欲をもって望めるといったことで、最終的にこのウェルビーイングに繋がっていく、そういったところの説明もできる。幸せかどうかといったことを調べることにはならないと考えているので、その辺りをうまく表現できればと思う。

(岡谷議長)

それ以外の3つの基本理念とウェルビーイングとの関係性をここに示すということではよろしいか。

(教育政策課長)

ウェルビーイングを新たに1個位置付けるというより、関係性をお示しするといったことで考えている。

(川田委員)

教育振興基本計画という名前があるから、基本理念の一番最初に「学ぶ意欲にあふれ」がきていると思うが、その学ぶ意欲のベースにあるものが最初にきた方がいいのではないかな。生まれたての子どもは学ぶ意欲にあふれていて、そのあふれている子どもたちの芽をどんどん繋げていくのは大人である。その子が本当にやりたいことをちゃんと見つけて伸ばせる体制を作るのであれば、この「学ぶ意欲」という言葉を最初に持つてくるのではなく、豊かな心や体があれば、学ぶ意欲に向かっていくので、そちらを最初の言葉に使うといいのではないかな。

(川村委員)

資料を見、ご説明を受けて、改めてこの計画は誰のためにあるのだろうと思った。行政が管理するためのものではない。これからの時代、地域や社会の中で子どもが自ら伸びていくために考え続ける、ということ念頭におくと、基本計画の頭に置く文言は、何となく響きの良いスローガンではダメで、前例に従うではなくしっかり考え直すべきではないかと思う。

この夏、教員向けに複数の研修を行ったが、「GIGAスクール」や「ICT」の意味を正しく言える先生が殆どいなかった。目指すべき姿を示す言葉の理解はとても大事な事。抽象的な言葉を先生が噛み砕いて、先生ごとカリキュラムや授業に落とし、子どももそれをその子なりに言語と体験で受け取って理解をして未来に向かっていくというサイクルを生まないと意味がない。総合計画に掲げる言葉がお飾りとして置かれているだけになるのを危惧している。

このお示しいただいた文言が全て悪いということではない。今回の基本理念の3つはすごく大事な事だと思うが、最初はやはり子どもたちが自分に向かって、「なぜ学ぶのか」を問い続けるものでありたい。「心豊か」という表現は少し曖昧。AIやセンサーなどデジタル技術の進化に伴い、“五感”が豊かであるか、ということ私意識している。デジタル技術では五感それぞれのデータを統合しAIを動かしていくが、人間は五感から得る曖昧なことに言葉を結びつけて思考したり、他人とコミュニケーションをとって共感しながら心を豊かにしていく。五感を言語化する力を強化しながら、夢

を形に変えていくための体験（教育）は、AIが急速に高度化している今、重要だと思っている。3番目のビジョンとなっている「多様な」の基本は「自分と他者」を意識することであり、2番目にした方がよいのではと思う。そして、3番目に自分（子ども）を中心に「社会や未来」に向かうビジョンである方が腹落ちしやすいのではないか。

先生や児童生徒、PTA、地域の方々にとって北極星になるのが基本計画だと思う。現行の計画では、子どもの学力や運動のこと、先生方の評価など主体の違う評価が混ざりあっているし、その評価が対象とするステークホルダーの状態が曖昧。誰のための計画がどのように進行しているのか、主体となる人達が自覚できるものであったほうがよいと思う。

（教育政策課長）

ご意見を踏まえて検討させていただければと思う。現時点で事務局として考えているのは、目指す人間像として、主に子どもを中心として、「子どもたちにこういう姿になってもらいたい」というものを記載している。教育が目指すゴールとを設定した上で、そのためにさらにどうすればいいのかという体系的なものを作っていくことを考えている。その表現は、今ご指摘いただいた通り検討できればと思うが、この方法の中で、例えば「何かによってこういうことができる人」というような、ある種、目的を達成するためのその前段階の手段、思考である場合もあったりするので、ここではどこまでそれを書き切るのか、次の段階にそれを移すのかというのは、体系図の整理の中でしっかりと趣旨は必ずどこかに入るものかと思う。どちらにもキャッチフレーズ的な部分もあるので、どこまでの文言で表すことができるのか、順番も含め、ご意見を踏まえて検討させていただければと思う。

（岡谷議長）

基本理念の考え方をしっかりとさせていただきたいというご意見だったと思う。

次に、資料5の4ページから7ページまでの「確かな学力の育成と、自己の将来との繋がりを見通した学びの展開」について、ご意見等あればお願いしたい。特に学力等の指標の考え方を修正するということだが、小中学校としては、国見委員いかがか。

（国見委員）

現在の小中学校の現状・課題、それから測定指標がこういうふう設定されている。それはその通りだと思うが、D層の児童生徒の割合の範囲、考え方を教えてほしい。徳の分野では、概ね国公立の小中学校を対象にしていると思うが、D層のここには記載が見当たらない。これは公立学校のみなのか、国公立が入っているのかを確認させていただきたい。

（小中学校課長）

このD層というのは文部科学省が示されているもので、公立のみである。

（岡谷議長）

高校のことも書いてあるが、藤田委員はいかがか。

（藤田委員）

資料5の4ページの「また、」という記載が高校にとってはすごくありがたい。高校卒業後は、就職にしても進学にしても、すぐに全国の同級生たちと競い合う状況が目の前にある。高校での学びは大半が進路の自己実現に関わっている学習なので、この表現はすごくありがたい。

また、7ページの次期基本計画の記載案で、その考えに基づいてC層以上に測定指標が移ったとい

うことは、校長としても先生方に話を持って行きやすい。進路決定のところなど、そういったところの表現がしっかり書かれていることは、県下の校長にとってもすごく取り組みやすい形になっていると思った。

記載案の3点目の「自分の可能性を広げるために勉強を頑張っている」と、その右隣の「勉強等に意欲を有すことができているか」というところで、高校生にとって高校生活というのは、学習と部活動という両面がある。勉強を、というふうに言われてしまうと、それぞれ得意分野で頑張っている生徒もいるので、ここの表現を検討いただけたら、子どもたちは自信を持って、自分の可能性について頑張っていると答えやすくなるのかなと思った。

(高等学校課長)

確かに可能性ということであれば、特に高校生の勉強に限らず、いろんな資格を取って就職していく生徒もいるわけなので、またその文言については検討させていただければと思う。

(岡谷議長)

次に、資料5の8ページの体の部分で、「健やかな体の育成と、基本的な生活習慣の定着」という形にして、9、10ページとその指標を若干修正していくということにしているが、この辺りの意見はいかがか。

(前田委員)

指標としてはこういうところをやっていくのが今までの通例でもあるし、ここで図っていくのが妥当であるとは思いつつ、やはり先ほどまでの議論の中でも、これは誰のための計画なのかということ考えた時に、子どもの結果で出た数字だけを指標として評価するのは少し乱暴な気がする。特にスポーツの場合は指導者のことについて、私からこの場ではずっと話をさせていただいてきたが、特に今回はウェルビーイングということが追加されるということだと、この指標の内容では子どもたちのモチベーションが下がっていく。特にさきほどの校則の議論もあったと思うが、上からの押さえつける指導が子どもたちのモチベーションだったりウェルビーイングを下げたりしていくという研究もたくさんある状況なので、特に資料5の9ページの「自主的に運動やスポーツを継続する」には、小学校や中学校期に楽しく運動ができる、スポーツができるという実感がかなり必要になってくる。他と足並みをそろえるという意味でもこの評価になると思うが、指導者がそういった研修、今だとスポーツマンシップの研修を受ける機会はたくさんある。高校野球で最近優勝したような方々も今スポーツマンシップの研修を受けられている方で、そういった方々の結果が出始めている。「なぜスポーツをやるのか」、指導としてもスポーツマンシップという枠組みの中では、必ずプレイヤーが中心であると、指導者は上から押さえつけるのではなくて、プレイヤーをサポートすることが明記されている。そういった考え方の部分を、どれだけの学校の先生方や体育の先生が学んでいるかどうか、そういった指標がこのトップにくるのか、これに紐づいてのところにくるのかは、非常に検討の余地があると思うので、その大人の関わり方について、ぜひ検討いただければと思う。

(保健体育課長)

子どもたちの部分については、体力の中で、一部項目が全国調査の中には出てくるので、そこで「楽しかった」とかそういうところの評価ができていくかと思う。また、先生方については、当課の方で体育主任会などいろんなところで調査もできようかと思う。さらに、学校も先生の質問紙もあるので、その内容をこの下の方に入れながら、全体として見ていきたい。

(教育政策課長)

少し補足をさせていただくと、この全体の測定指標は総じて子どもたちがこうなる、子どもたちがこう思うというものを、不登校は少し違うが置いており、その前提として、例えば先生がそういう力を見せるとか、そういったようなことは、その手法として、今後の対策事業として位置付けていければというふうに考えている。そこにおそらくKPIとして、前田委員がおっしゃるような話は挙がってくるかと思う。

例えば、この中でよく言われるような、先生の働き方改革が挙がっていないというような話も、一般の総合教育会議でもあったが、こういった子どもたちの姿を達成するために、前提として先生たちは働きやすいといけないうちで、その手法として先生たちの働きやすい環境改革を対策事業として打ち出していくことは考えている。

(岡谷議長)

特別支援教育や幼児教育などはどうか。健やかな体の育成ということで、高校は体力だけが関わっているような感じがして、そのあとに生活習慣の定着があるが、青少年の性の問題だとか、保健分野も健やかな体の育成には重要である。特に高知県の問題を考えたときに、その辺りのことがいろいろな審議会に出てくるが、そういったことは議論されたのかどうか教えていただきたい。

(保健体育課長)

性に関することについては、現在外部講師の方も入っていただいて、性教育の推進協議会を立ち上げている。その中で、産婦人会や助産師会などにも学校現場に入っていただいているので、そういったことで子どもたちの変容や、アンケートもとっていくようになると思う。健やかな体ということで、図っていくようなものもこの下の方で出てこようかと思う。

(岡谷議長)

目標を図る上での指標には入れないけれども、政策の中には当然入ってくるだろうということで、その辺りも大きな考え方で、「入れてくれ」とは言わないが、考えてみてはどうかと思う。

続いて、11 ページから不登校の部分について基本目標に挙げていて、その他のところでも「豊かな心の育成と、多様な思い・考え方を尊重する機運の醸成」という形にしたいということだが、11 ページから 15 ページについて、ご意見を賜りたい。

(西内委員)

1 点だけ検討いただきたいことがある。11 ページの不登校のところ、未然防止という表現がある。文部科学省も使っている表現なので、だめとは思わないが、ただ高知県は不登校がずっと多いとか、新規の不登校が増えているので、「未然防止」と聞くと、先生方からすると、「出してはいけない」、「抑えないといけない」と解釈してしまい、せっかく子どもが、「学校に行きたくない、行けない」という意思表示をしているのに、それを無理やり連れて来ないといけないうちで解釈すると、かえって深刻になってしまう。どの先生が読んでも誤解されづらい高知県独自の表現を検討いただきたい。「未然の支援」とか「日常的な関わり」とか、「抑えないといけない」というふうにはならないような表現をしていただけたらいいのかなと思う。

社会福祉で言うと、不登校自体が、その子が学校に対して、うまくいっていないという意思表示であり、行動で示しているものと捉える。必ずしも本人だけが悪いのではないので、「抑えないといけない」とか、「無理矢理来ないといけない」という発想にはならない。次期計画についても、多分高知県だと、お話があったように家庭でいろんな問題を抱えているとか、地域の繋がりが弱いとか、学

校まで時間がかかる、交通手段がないとか、そういういろんな問題が不登校に出てきている。また、障害者もあると思うが、いろんな問題が出てきているという捉え方をすると、表現自体は検討していただいて、むしろそこをきっかけにして、可能であればその前の悩んでいる段階から関わられたらいいと思う。保護者の方とも話ができる関係になるような表現をしていただけないかなと思っている。

（人権教育・児童生徒課長）

未然防止、早期支援や自立支援という形で、これまで不登校対策という言葉を使ってきた。学校での未然防止については、学校ができること、新たな不登校の子どもを生まないような魅力ある学校づくりや授業改善など、そういう部分を未然防止として学校の先生方にもこれまで一定説明してきたところである。

ただ、不登校の子どもたちの立場で考えると、やはり委員がおっしゃるような、「抑えなければならぬ」とか、「生まれたらいいけない」ということが前面に出てはいけなないので、伝え方や表現もう一度考えてみたいと思う。

（西内委員）

先ほどの映像で高校生が言っていたように、先生方が魅力ある学校だと思っても、それを子どもたちがどう受けとめるかはまた別なので、先生方が頑張っていますよと言っても、それを頑張っているとか、あるいは魅力ある学校と受け取らない可能性がある。高知県でもそういった現状がないだろうか。子どもたちから見たときに、「学校に行きたい」とか、「家にいるよりは学校に行って勉強をしたい」と思えるようになれば、不登校が減っていくと思う。その辺りの表現の検討をぜひお願いできればと思う。

（中島委員）

話を聞いていて、自分の小学校の頃を思い出した。私はあまり学習に前向きな子ではなく、親が心配して進学塾に入れられて、勉強が嫌いになっていった。小学校の時に絵を描いて、先生でなく友達に褒められた。その時から学校へ行くことの抵抗感がなくなった。自分の素晴らしいところは一人で認めることはできない。先生が褒めてくれても、それを見た友達が「いい格好して」とか、「先生はあの子ばかり褒めて」とかになるので、生徒同士が「すごいね」とか、勉強でなくても、何でもないことでいいので、そういう機会を作ることがすごく大事ではないか。私は数学が嫌いだったが、今アンケート調査などで統計をやっているのでも、それもものすごく重要になってくる。人間は好きなことをやるために必要だと思ったりびっくりするくらい勉強嫌いでもできたりする。小学校の時から、ずっとみんなから褒められなくても、たくさん人の前でなくてもいいので、何かのきっかけで、あ のときにこれで人に褒められたという機会を生徒が1回ぐらいは体験できるように、教育の現場でも家庭でも何か進められたら、その瞬間から何かスイッチが変わるような可能性が子どもにはある。そういうところは盛り込めないと思う。「何か一ついいところを自分で見つけよう」とか、「私は漫画が上手です」とか、「見るのが好きで家には何百冊あります」とかでもかまわないので、周りの人が認める瞬間を、全部容認されるようなものがあればよい。「授業で発言のときに手を挙げて良かった」とか、「皆の方を見てしゃべったのがよかった」とか、子どもってそういうことで伸びていくので、ぜひそういう気持ちを生かしていただけたらいいと思う。

（山本委員）

幼児期は、初めて家庭から集団生活に入って、自分と友達の違いにまず出会う場である。個々の違いを尊重する。基本理念の3番目の柱に多様性と挙げられているが、社会で多様な学び方や生き方な

ど、柔軟性のある学校生活の提案をされていることに驚いた。こういうことも学校生活で考えられる、今高知県でこういうことが必要になっているという具体的な取組について回を重ねる毎に改善できていることに感動する。この多様性の視点で、幼児教育を実践していくことが大事だと感じた。

柱の1つ目の意欲的に学ぶという話があったが、幼児の場合はまず「やりたい、知りたい、聞きたい」という意欲や心情・行動や態度が大事である。それを「遊びを通して総合的に生活していく中で学び取っていくところが幼児教育の基本」と高知県のあるべき姿を考えた。

私は、幼児教育の研修支援アドバイザーをしているが、幼児教育の現場で、一人一人の違いがお互いに尊重される幼児教育であるのか。また、「苦手なところを一生懸命克服していくのではなくて、その子の得意なところをしっかりと認め伸ばしていくことで、自己肯定感や自尊感情、意欲に溢れた子どもにして、小学校へ送りたい」と思う。こうした視点からも園内研修支援で私たち支援アドバイザーがやっていくことは必然性がある。幼保支援課には、研修支援の継続をお願いしたい。

(橋本委員)

不登校のところ、決して本人だけの問題ではないことが前提として入っているのはとても必要だと思った。本人の問題でないところから不登校が生じていることもある。様々な理由もあると思うが、発達障害が背景にある場合も決して少なくはない。そういった場合に、環境がいろいろ作用していることも考えられるので、そこで正しい理解に繋がって、きちんと対策に繋がると非常にいいと思っている。

多様な学びのところで、私は特別支援教育の分野なので、障害があれば現状だけではどうしてもできないことがあって、「じゃあどうしたらできるのか」をやはり考える。それが一人一人に応じてとなると、どうしても多様になる。そういった共通点なども踏まえながら、どんな多様な場、方法が考えられるのか検討して欲しい。次世代総合教育会議での高校生の発言を聞いていると、私たちがこれから大事だと思っていることを生徒たちも先取りして考えている。そういうことは本当に今、事実として求められているし、そういうことがないと、多様性を認め合い、一人一人の違いが大事にされて一人一人が活かされる、力を発揮して貢献できる、そういう人に育っていかないということも関係していると思う。基本理念の自分と他者というところで、多様性を認め合ってという文言が入ったことはすごく必要なことだと思う。学校現場でも、それは分かっている、今までやってきたこととか、今までの考え方みたいなものから、なかなか離れられない面もある。そういうようなところを、今の求められている姿である、個別最適な学びや協働的な学びを一体的にやっていくこともそうだと思うが、なかなか学校が変われない部分にメスを入れるというか、それが学校経営や学級経営の指針にも反映をしていくところも期待できるのではないかという意味で、すごくじっくりくる。

(岡谷議長)

11ページの「豊かな心の育成と、多様な思い・考え方を尊重する機運の醸成」というのは、機運を醸成すればいいということで大丈夫なのか。例えば「多様な思い・考え方の尊重」にする必要はないのか、機運の醸成というところに何か事務局としての考え方があるのか、お聞きしたい。

(教育政策課長)

この「機運の醸成」という表現は、まさに議長がおっしゃったように、「もう少し、一歩先に進めないのか」と、総合教育会議でもご指摘をいただいている。心の育成という言葉で書き分けをするような観点からこういう表現を一旦置いたところではある。この文言の表現をさらにもう少し先に進めた形になるよう、他の2つの書き方も含めて引き続き検討していくように考えている。

(前田委員)

体の部分の基本目標で、体力や健康的な生活習慣を「身につけさせる」ではなく、「身につける」とか、「育む」とかそういう表現の方がいいのではないかと思う。

(岡谷議長)

その部分は、またご確認いただければと思う。

(川村委員)

評価について、「やっていますか」という聞き方をすると、多分「やっています、やっていません」という話になってしまう。問うこと自体が行動変容のトリガーとなることを意識しないと、ただ数字を集めるだけになってしまうのではないか？

学校の地域連携活動において、外部支援者は当然、子どもの成長に力が入るので「ここがダメです！」、「あそこはできていませんよ！」と、真摯に厳しいアドバイスをくださる。子どもは素直に受け止め、自分が足りていないところを自覚することで変わる。一方、先生方は100%きちんとやらないといけないという責任感が強い方々が多いので、「できていないからもうやめよう」となってしまう、連携が進まない状態を多々見てきた。だからこそ、次期基本計画では、まず子どもたちが変わっていくことで大人も引っ張られて変容していくことも考えて欲しい。

今夏、大方高校で地域の高齢者にデジタルデバイス解消を意識した防災×スマホ活用教室を行った。企画も講師も学生が行った。LINE でいろんな防災クイズを出して使い方の練習をしてもらいながら、LINE と Google のスプレッドシートを連携させて、回答結果をすぐにグラフ分析図としてスクリーンに映し出し、解説を行っていた。シニアの皆さんは前のめりになって学生の解説を聞き、熱心に操作を学んでいた。こんなふうに関心、個々の情報を取得し、すぐさま分析・確認・次の行動に生かすことが高校生でも簡単にできるようになった。実際、社会ではデジタルマーケティングが秒や分刻みで世の中の仕組みに影響を及ぼしている。次世代総合教育会議の取組はものすごく素晴らしいと思う。この学生たちが話し合ったことが、どのように生かされ、何が変わって、私たちはどういう状態にいるのか、フィードバックをお願いしたい。そして、常に総合計画で謳われた事々の現状を確認でき、学生も先生も自ら“こうしよう！”と行動できるような指標づくりが必要ではないかと思う。

(教育政策課長)

ご指摘の通りである。次世代総合教育会議で5人の委員から発表いただき、他の若者たちからもご意見をいただいているが、もらえばなしではなく、ご意見をいただいた上での責任等もあるので、そこはしっかりとご説明することをしている。そういった観点からも今回まとめた資料もこういった会議でもご説明させていただくのがまず最初のステップである。また指標設定もして、今後もこの計画等々を策定していくにあたって、実際高校生委員の方々の意見をどのように反映をさせて、大綱、計画に繋げていったのか、そこはしっかり明示的にお示しする。そこでまた、自分たちが言ったことが、行政の計画にしっかり位置付けられて、施策になっていくプロセスを体験していただいて、「今後こういうこともやってみよう」みたいなことも思ってもらって一助になればとも考えている。また、ご意見いただければと思う。

(佐竹委員)

感想になるが、大変細かな目標まで作っていただいて感謝する。私の体験談で、2週間ほど前に仙台に出張があり、ちょうど仙台育英高校が準優勝した後で、監督のお言葉をいただくことができ、大変勉強になった。先ほど前田委員が言われたように、校則はどうしていけないのか、大人が押しえつ

けていないかという意見もあった。監督のお話の中で、今、生徒に野球を教えている中で、前のように「水を飲むな」、「ただ走れ」ではなくて、「どうして、何をしなくてはいけないか」という話があった。私たちは大分歳も取って固定概念もあるが、今の子どもたちはスポンジのように吸収する。なぜあれをしないといけないかというのを子どもたちに説明をして、この目標もそうだが、どうやって導いていくのかということは、私たちが考えてサポートしなくてはいけないと思った。

(岡谷議長)

皆様忌憚のないご意見をありがとうございました。本日いただきました意見については、事務局の方でしっかりとご検討いただければと思う。